

デューイの中国経験再考：南イリノイ大学所蔵資料に基づいて

劉 幸

二十世紀の中国教育に重要な影響を与えたものの一つにジョン・デューイ（1859-1952）の教育思想があることは言うまでもない。その影響は二十世紀の初頭から現在に至るまで、脈々と続いている。もちろん、過去の百年で、デューイの教育思想は、中国だけではなく、日本、イギリス、トルコ、メキシコなど、世界諸国に導入され、教育現場と研究界に影響を及ぼしている。特に、2016年にデューイの『民主主義と教育』公刊100年を記念して世界各地で開かれた様々な記念行事は、デューイの深い影響を示す証の一つであると言える。

なかでも、デューイと中国の関係は最も深いとも言えるだろう。デューイは1919年4月30日から1921年7月29日まで、二年二ヶ月以上中国に滞在し、中華民国の教育部、国立北京大学、北京高等師範学校、南京高等師範学校を含む諸機関で講演したり、各地を訪問したりして、いわゆる「デューイ熱」を醸成させていた。このような長期の海外滞在は、デューイの九十二年の歲月の中では、一回しかなかった。デューイ本人は、この二年間の滞在を「今までにしたことの中で、最も興味深く、知的に最も有益なこと」(This is most interesting and intellectually the most profitable thing I have ever done)¹と評価している。デューイのコロンビア大学の弟子たちも、「デューイは一生を通じて、中国との繋がりを保っている」²と指摘している。この歴史は、今はエピソードとして、一般にもよく知られていて、南開大学の元青（『デューイと中国』、2001）、台湾嘉義大学の Jessica Ching-Sze Wang（*John Dewey in China*、2007）など一連の先行研究にも見られる。

先行研究では、デューイの教育思想と中国の教育界の関係を「影響－受容」という図式に特徴づけるのが一般的である。要するに、デューイが提唱した教育理論は十分に発達したものとして、中国側は主として彼の理論を受けとり吸収し、そしてそれを実践していた、ということである。その意味では、デューイの中国影響は一方通行のようだった。しかし、デューイ本人は、この二年の間に、何を見つけたのか、何を考えていたのか、そして中国をどのように理解しているのか、という問題に注目する研究は非常に少ない。なかでも、デューイが中国に二年間滞在することを

Liu Xing（北京師範大学講師）

¹ Larry Hickman (Ed.), *The Correspondence of John Dewey*, Charlottesville: InteLex, 2002, No. 04888.

² Corliss Lamont (Ed.), *Dialogue on Dewey*, New York: Horizon Press, 1959, p.128.

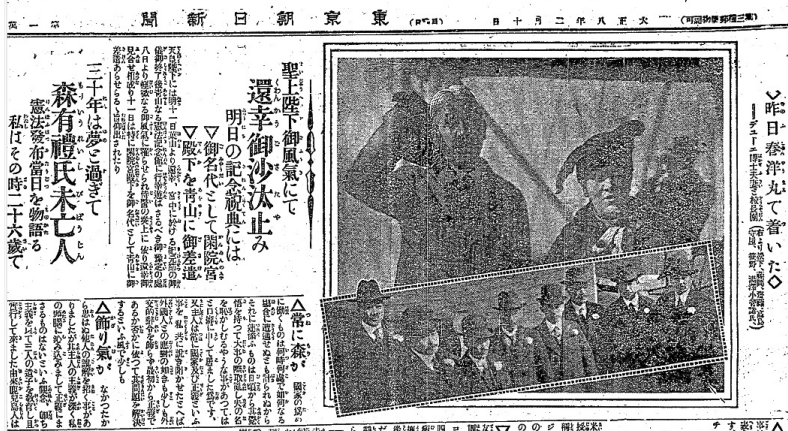
決めた一番肝心の理由は何だろうか、という問題を看過すれば、デューイの教育思想の文脈を把握できないのではないだろうか。

筆者は2020年1月に、アメリカに渡り、南イリノイ大学カーボンデル校のデューイ研究センター（Center for Dewey Studies, Southern Illinois University Carbondale）で、半月にわたり、デューイが残した中国関係資料をひとつずつ点検していった。本論は、主に、デューイ研究センターで発見した資料に基づき、中国滞在期のデューイの思想の動きを解釈しようとするものである。なお、付記しておくが、筆者がこの調査をした頃、新型コロナウイルス感染症はまだ世界的な流行には至っていなかった。そのときとは世界の様子がまるで変わってしまったことに衝撃を受けている。

一、日本を経由して中国へ

デューイは元々小野英二郎と渋沢栄一の招待で、東京帝国大学哲学科の講演者として、日本に来了。デューイ夫婦が横浜に到着したのは1919年2月9日である。同年2月10日の『東京朝日新聞』『読売新聞』などには、デューイ夫婦の写真入りの記事が掲載されている。

（図1：1919年2月10日の『東京朝日新聞』。朝日新聞社より許諾を得て転載）



一連の訪問と遊歴後、「現在の哲学の位置—哲学の改造の諸問題」と題する演説は、「2月25日から3月21日までの火曜と金曜に行われ、主な聴講者は、東京帝大その他の大学および高等師範学校の教員と学生であった」³。当時、デューイが日本に来了という情報は中国にとっても大騒ぎだったのである。元コロンビア大学の留学生である胡適、蒋夢麟（北京大学）、郭秉文、陶行知（南京高等師範学校）は北京大学の名義で、コロンビア大学へ招待の電報を送った。3月中旬ごろ、デューイは中国への訪問を受諾したが、彼はそれがあくまでも数週間の旅行のようなものだとしていた。東京以外、デューイは鎌倉、大阪、京都なども訪ねた。4月28日、デューイ夫婦は神戸で船に乗って、上海に向かった。

³ 北村三子：「1919年のデューイと日本」、『駒澤大学教育学研究論集』、第26号、2010年、第18頁。

二、アジア美術とデューイ

その後、デューイの中国での講演は、特に教育の分野で大きな影響力を持ったため、デューイの講演は事前に非常に綿密に計画されたものだと思う人もいるかもしれない。しかし、実際には、デューイは何の準備もせず中国にやってきた。船の上でも、デューイは中国にどれくらいの期間いるのか、何をしなければならないのか、どれくらいの給料がもらえるのか、全くわからなかったで、やや不安を抱いていた⁴。実は、講演することも、彼が中国で行った多くの活動の一つに過ぎなかった。デューイ研究センターの資料によれば、デューイはこの期間に多くの美術作品を蒐集している。

中国関連資料の中で最も注目されるのは、一足の靴である。刺繍の入った靴が完璧に保存されているが、南イリノイ大学のカatalogでは「Chinese Embroidered Baby Shoe」（刺繍の入った中国の子供の靴）と名付けられている。これは文化的な疎外感による誤解だろう。実はこれが纏足⁵した女性の刺繍靴であることが中国人には一目でわかる。

(図2: John Dewey Papers(JDP), Series 6: Memorabilia, Notes, Art, and Personal Effects, Box 59, Item 8)



中国に到着して間もない5月、デューイ夫婦は、清の將軍曾國藩の末娘曾紀芬（1852-1942）に会った。曾は、当時六十七歳で、「崇徳老人」と名乗り、上海に定住していた。1919年5月2日付の手紙の中で、妻のアリスは、曾が「足が小さく、10人の子供がいる女性」であることを強調している。曾紀芬が、新聞を通じて、妾制度の廃止を訴えているが、中国の富裕層ではそういう状況は変わらないということも、アリスの手紙に記載されている。

胡適と蔣夢麟の妻たちも、農村で育てられて、纏足した女性なので、手紙の中で、デューイが愕然とした記録もしばしば見られる。何の準備もせず、初めて中国を訪れたデューイのようなアメリカ人にとって、纏足の民俗は、最も視覚的に印象的なものだっただろうか。それ故に、この一足の刺繍靴は今に至るまで、完璧に保存されている。

また、手刺繍で一針一針重ね描いた「風景画」二枚も、研究センターで保存されている。一つめは、「第一級七学期孫潔秋成績品，戊午夏製於女工伝習所」と題され、もう一つは「第一級七

⁴ Jessica Ching-Sze Wang, John Dewey in China. Albany: State University of New York Press, 2007, p.4.

⁵ 纏足文化ができたのは、小さい足の女性の方が美しいと考えられていたがゆえである。

学期成績品、戊午夏劉采蘋絵並繡」と題されている。どちらも、朱色で「南通女工伝習所製」の印が入っている。張謇（1853-1926）によって創られた南通女工伝習所は、優秀な女性工芸者を輩出し、中国の工芸伝承と女性教育の歴史に強い足跡を残している。『張謇自訂年譜』によると、1920年4月、「米国人杜威(デューウエー)来通講演」⁶という記載がある。デューイは、23日まで、南通で講演し、張謇の経営する地元の産業や学校を幅広く見学した。張謇はこの時、同校の戊午（1918）年クラスの優秀な学生二人の作品をデューイ夫婦にプレゼントしたと推定される。この二つの刺繡風景画は、デューイに大切にされて、状態は非常に良く、手触りも新品のようである。

これらの資料から、デューイが中国の美術に興味を持ったことが窺える。デューイの手紙ファイル（JDP, Box 4, Folder 1）には、四つの骨董品の鑑定書も入っている。鑑定書は中国教育部専用の用紙に書かれて、「官僚 M. D. Lu」という署名もある。それは、デューイが所持する黄道州の「松」（Pine Tree）、楊文驄の「山水」（Landscape）、呉斌の「四季」（The Four Seasons）という明代の絵画3点と、明代以降の錦織1点が本物であることを証明する鑑定書である。日付は1921年7月8日である。

早くもその年の1月15日には、デューイはアメリカの友人バーンズ（Barnes）に手紙を送り、次のように書いている：「先日、私たちは中国に保存される最高の古代絵画の何枚を見る機会があった。あなた（バーンズ）と一緒に行けなかったのは残念だ。それらの絵画について、最も気になるのは技術力の高さである。中国人は古物好きで、伝統的文化の教養も重視している。このことは、書道や漢字への情熱から最も端的に見られる。驚いたことに、ほとんどの知識人は、1日に1-2時間をかけ、書道を研鑽している。」⁷

2月16日のデューイの手紙には、「教育部においては、絵画鑑定の経験が豊かにある目利きの友人が、ある清朝の官僚が何枚かの名画を売ってお金に変えようとしていると、僕に伝えてきた。見に行くと確かに立派な明朝の山水画であるが、値段はわずか200ドルだった。それは本物だと友人が確信しているが、僕は購入しなかった。ラッセルに推薦した」⁸と書いてある。2月に、デューイは控えめに、中国を訪問した、イギリスの哲学者であるラッセルにこの機会を譲ったが、7月に、おそらく少し重みのある記念品を持ち帰るために、デューイは教育部のこの友人に連絡し、鑑定書によって証明されたように、アンティークの絵画や錦織のコレクションを購入した。この四つの美術品は、行方が不明であるのは残念だが、デューイがかつて大切にしていた美術品であることは見てとれる。

実際、当時のデューイの手紙を見ると、デューイ夫婦は日本と中国で絵画以外にも多くのものを手に入れていた。1920年6月16日の手紙の中で、アリスは、彼女がもらった三つの磁器について、「緑の面白い配置で、しばしばハイライトに淡い白が混じっている。釉薬も非常に薄い」⁹

⁶ 張謇：『張謇自訂年譜』、鈴木拓郎訳、ゆまに書房、2016年、第202頁。

⁷ Hickman, No. 04091.

⁸ Hickman, No. 04092.

⁹ Hickman, No. 03926.

と述べている。アリスは来日中にアジアの美術に興味を持ち、4月15日には山中商会を訪ねて¹⁰、午後はずっと商会を見て回っていた。中国滞在中の手紙は、中古市場で買ったものについても何度か語っている。

また、2020年4月19日付の中国の新聞『南方都市報』によると、ある明時代の『羅漢渡海図』の後ろに、デューイの題跋が発見された。「It seems impossible to suggest the movement and evanescence of life with greater delicacy and certainty. John Dewey」（これ以上繊細で確実な生命の動きと儚さを描くことは不可能と思う。ジョン・デューイ）と書かれている。蘇州博物館の学芸員申聞によると、この題跋は1920年のものだと思われる。これは、いままで見つかった最も古い外国人の題跋かもしれない。

デューイが中国を訪問する1920、30年代は、アメリカの資本がアジアに大量に進出し、アジアの美術品のコレクションを獲得し始めたところであり、清・宮廷書画などの貴重な国宝が海外に流失する時代でもある。1923年には、フリーア美術館（Freer Gallery of Art）がアメリカ初のアジア専門美術館として開館した（これは日本を含む中国やインドを中心としたアジアの古美術品が展示されている美術館である）。1914年には、ニューヨークのメトロポリタン美術館に中国古代絵画のファーガソン（Ferguson）・コレクションが展示されていた。これは米中文化交流にとって画期的な出来事であると言える。デューイが住むマンションはニューヨーク5番街1158号（1158, 5th Ave, New York）にあり、メトロポリタン美術館のすぐ近いところである。その時、デューイは先に言及したバーンズのような、美術のコレクターと親しくなっていた。また、アメリカでは、「1880年代半ば以降は、日本趣味の流行が大衆化してゆき、安価な工芸品や雑貨市場を中心に、より幅広い人々の中に芸術的な日本製品が入り込んでゆく時代となった」¹¹。当時のアメリカ人は、異国情緒あふれる極東の世界を、好奇心をもって見たり、想像したりしており、デューイの手紙にも「東半球を訪れる機会があることを長年願っていた」¹²とある。以上は、デューイが中国を訪問した際の、デューイの社交的な領域もしくは交友関係の背景及び時代風景である。

この「アジア風味」は、一方通行のアメリカの想像力に由来するだけでなく、当時の中国人も意識的にも無意識的にもこの想像に貢献していたと言っても過言ではない。張謇は、上記の刺繍風景画を中国文化の代表として、デューイにプレゼントした。

また、研究センターには、二つの中国アルバムが保存されている。表紙に「中国アルバム」（China Album）と記されたベージュ色のアルバムは、タイトルページに「杜威先生遊奉（天）紀念，馬肅綱敬贈，中華民國八年十一月九日」と記されており、瀋陽の皇居内にある大政殿や西華表の写真が

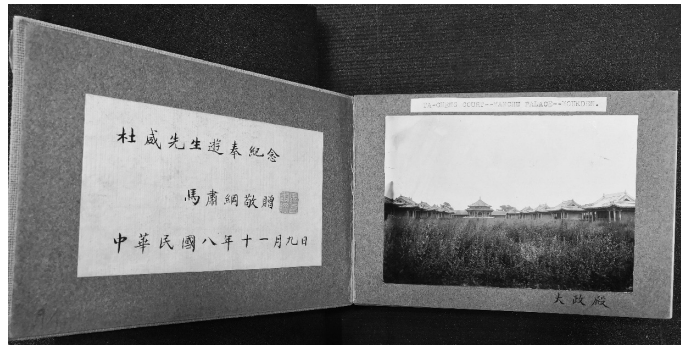
¹⁰ 山中商会は、日本の美術商社である。江戸時代の大坂の経師伊丹屋を起源とし、明治時代以降ニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロンドン等に支店を設けて日本美術品を輸出、1900年代以降は中国で大量に買い付けた品を欧米に流し、巨万の富を築いた。

¹¹ 中島朋子：「19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカの日本美術理解」、『文明研究』第26号、2008、第2頁。

¹² Hickman, No. 03900.

多くのフレームに収められている。「MANCHU PALACE」などの説明用の英語単語も見える。

(図3：John Dewey Photograph Collection(JDPC), Series 7, Box 9a, Item 1)

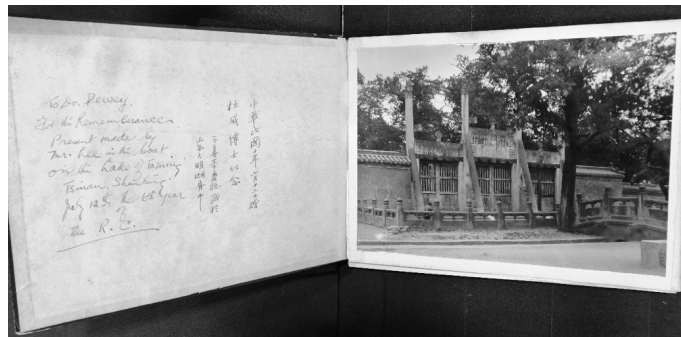


もう一つの濃い緑色のアルバムは、表紙に「聖廟孔林全景」という漢字が書かれて、タイトルページに中国語と英語で贈り物と刻まれている：「中華民國十年七月十二日贈杜威博士記念，子善李慶施識於山東大明湖舟中。To Dr. Dewey, For the Remembrance, Present made by Mr. Lee in the boat on the Lake of Taming Tsinan, Shandong, July 12, The 10 year The R.C.」。孔子廟の写真が10枚以上掲載されている。

(図4：JDPC, Series 7, Box 9, Item 2)



(図5：JDPC, Series 7, Box 9, Item 2)



馬肅綱も李慶施も地元の官僚である。デューイが中国に来た1919年から、山東経由で中国を離れた1921年まで、中国人がデューイに何かをプレゼントすると、そのほとんどがこのような古典的なものであったことは明らかである。貧しく弱体化していた中国にとっては、これも仕方が無いことだったのだろうか。したがって、このような「中華風」とは、客とホストとの交流の中で醸し出される一種の雰囲気ともいえる。

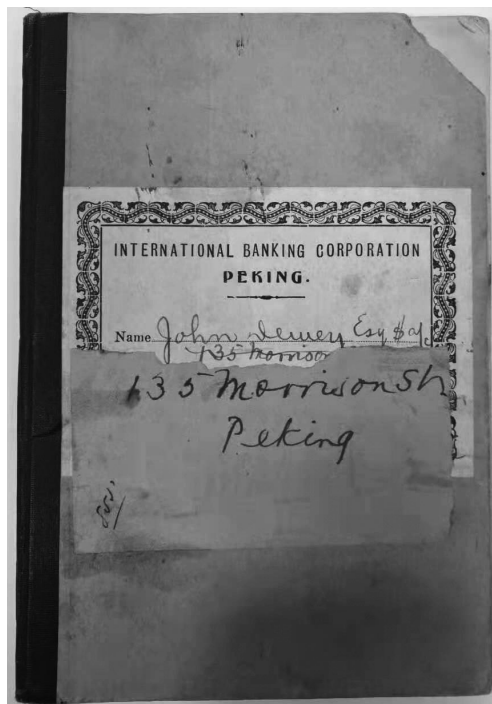
三、デューイの経済状況

デューイが中国滞在中に比較的快適な生活を送り、心ゆくまでアジア美術品を手に入れることができたことは想像に難くない。これは、この間の彼の経済状況と密接に関係している。

研究センターには、幸いにもデューイの中国滞在中の銀行通帳や税務申告書が保存されており、彼の当時の生活状況を理解するための貴重な直接の情報を入手することができる。

デューイが残した通帳は米系国際銀行（International Banking Corporation）北京支店で開設され、デューイ自身が所有したものである。この通帳だけを見ると、1919年7月からその年の終わりまで、デューイはこの口座から3,848.54ドルを受け取り、すべての費用の後に641.76ドルの残高を残しているように見える。1920年、デューイは合計3,176.61ドルを稼ぎ、すべての支出の後に727.88ドルの残高を残し、1921年には、6月7日に中国で取得した1,200ドルの最後の入金の時点で、その年の収入は4,796.88ドルだった。

（図6：JDP, Box40, Folder 1）



Dr. John Seavey Eq. \$40		Cr.	
July 12 By deposit	360 95	July 31 To bank	69651
Aug 6	900	35	2
	1200	30	3
		Aug 1	4
		5	5
		8	8
		11	56
		19	7
		23	9
		30	6
		-	60
			69
			597 25
			597 25

1920年4月11日、中国で1年近く過ごした後、デューイは、彼の体重増加について子供たちに冗談を言った：「私は、私がどれだけ太ってきたのかをあなたに話したことはないが、数ヶ月前に自分自身の体重を量ろうとしたとき、それが170だった。それ以来、その数字が受け入れられないと思ったことはない。」¹³

— 20 —

四、デューイの関心

中国で比較的ゆったりとした日々を過ごしていたデューイは、何を気にしていたのだろうか。それは中国の近代国家の形成過程であると思う。

ベネディクト・アンダーソン (Benedict Anderson, 1936-2015) が1981年に上梓した『想像の共同体』(*Imagined Communities*) は、現代のナショナリズム研究に最も影響力のある作品であることは間違いなく、世界中で広く読まれている本である。アンダーソンは、ネーション (nation) は想像の政治的共同体であると言い切った。

それは、実際には誰一人として、他のすべての同胞のことを知るができない、あるいは会ったことすらないコミュニティであることから、「想像」という特徴を持っている。このように、この共同体の人々の間のいわゆる感情的な結びつきは、本来、想像力に依存している。しかし、この想像力は決して弱いものではなく、それどころか、大きなまとまりの力を持っている。このような想像の政治的共同体の誕生の経路が、アンダーソンにより描き出されている。まず、「神聖な言語が衰退する」ということで、ラテン語の影響力が衰退すると、ヨーロッパ各地の庶民がその各地の言葉で気持ちを伝えるようになり、それがその後の「印刷—活字」文化と強く相互作用して、国民的な文学が生まれてきた。同時に、新聞を読むことが「並外れた大衆意識」として朝の祈りに取って代わるようになり、何万部もの新聞が人々の朝食のテーブルで「ほぼ一斉に、分刻みで」消費され、同じ瞬間に、自分と同じ新聞を見ている人が無数にいることを誰もが知っている。さらに、大航海時代以降の交流の増加は、異なるグループの人々のアイデンティティの感覚をある程度強め、「私」と「他者」の区別を明らかにした。最後に、現代の公立学校制度は、この意識を若い世代に「再生産」することで、ナショナリズム意識を徐々に根付かせている¹⁴。

偶然にも、中国にいたデューイと、長年東南アジアで活躍していたアンダーソンは、この問題で高いレベルで意見が一致していた。

デューイは、1919年5月1日に早くも子供たちへの手紙の中で、「(胡適)と彼の友人たちは、政治をあきらめている—それはかなり悪い仕事だと思うが—そして、彼らは一種の『文学革命』と呼ばれる事業に身を投じている。『文学革命』は文字通りの意味での単なる文学ではなく、現代の口語体の使用を意味し、それなしでは現代の問題を議論することはできない」¹⁵と述べていた。この時期は、ちょうど胡適らがイプセンなどの翻訳を通じた中国口語文学の振興に躍起になっていた時期であるので、中国語を全然話せないデューイにとって、このような具体的な内容は恐らく、多くは胡適から聞いたものだと想定できる。

デューイは、後に『アジア』誌に「中国の新文化」という文章を投稿した：この「文学革命」は「自由形式の詩からトーマス・ハーディ、ジョージ・バーナード・ショー、イプセン、メーテルリンクまで、西洋文学の潮流に特有のものを中国の読者に馴染ませながら、一般的な口語で執

¹⁴ Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, New York: Verso, 2006.

¹⁵ Hickman, No. 03899.

筆・出版しようとする試みである」と明言している。古い言葉の束縛を解くことは、同時に思考の束縛を解くことでもあった。言語的変容とともに、「社会主義文学、アナキズム、マルクス、クロポトキンは、読書家の間で野火のように広がっていった。」¹⁶

デューイは中国語が全然読めなかったが、近代中国で新聞が果たした役割を肌で感じていたのである。1921年7月25日、帰国が迫った日、デューイは子供たちをからかって言った：「済南の新聞マンはとても面白いので、毎回の授業では、私が教える内容を速記している。昨夜の夕食会では、私に新聞を見せてくれた。僕の講義四回、お母様の講義二回は、いずれも新聞に掲載されている。教育学の講義がニュースとして、報道される国を離れるのがどれだけ嫌なのかがわかるはずでしょう。」¹⁷

上海で登場してから、デューイの演説は、ほとんどは、新聞や政府の会報で、定期的な連載の形で、中国の読者に読まれている。その後は、『中国におけるデューイの講演集』、『デューイの五大演説』などの単行本にまとめられた。例えば、中華民国教育部発行の『教育公報』は、1919年の第8号に上海での演説から抜粋した「デューイの演説」を掲載し、1921年の第12号まで続き、最終的には済南での演説の原稿である「学校の管理及び社会との関係」を掲載している。当時、魯迅も、デューイの演説を『教育公報』から一枚ずつ切り取って、自分の手で編纂した経験もある¹⁸。このように、デューイの理論は、大きな単行本の形ではなく、連載記事として中国に入ってきて、新聞を通じて一種の「デューイ熱」を生み出したのである。

そして、中国の「他者」との対峙の感覚が日本によって触発されたことにも、デューイは注目した。「五四運動」は日中紛争の激化の産物である事は言うまでもない。これを受けて、デューイは「中国は一つの国なのか」という文章を書いている。「中国の多くの人口密集地では、人は数マイル歩くだけで、同胞の言葉を理解することができない。」¹⁹ 南北の分断、地理的な孤立、公共の精神の欠如が、デューイが中国の国家としての一体感を感じられなかった原因である。しかし、デューイはまた、「中国は、我々が理解するような国家ではないことは驚くべきことではない。そもそも、国家の起源は非常に最近のものだろう」と洞察力に満ちた指摘をした。「中国は国家なのか？ いや。我々の国家の基準として、答は否である。しかし、肝腎なのは、中国は国家になりつつあるのか？」²⁰

「今日存在するナショナリズム的な感情は、大部分が外国の侵略に対する反動の産物である」とデューイは指摘している。この場合、外国は実際に日本を指している。パリ講和会議で、日本の山東謀略は、「共同体」としての中国の感情を高め、ますます洗練されたマスコミという媒体を通じて、より多くの中国の人々のコンセンサスとなっていった。

¹⁶ John Dewey, The Middle Works of John Dewey, Vol.12, Carbondale: Southern Illinois University Press, 2008, p.109.

¹⁷ Hickman, No. 03964.

¹⁸ 魯迅：『魯迅全集・第十一卷・書信』、人民文学出版社、2005年、第399-400頁。

¹⁹ John Dewey, MW, Vol.13, p.72.

²⁰ John Dewey, MW, Vol.13, p.73.

最後の要因である教育の影響については、デューイが中国に来たとき、中国に最も影響を与えたのは教育界だったのは言うまでもない。デューイもまた、多くの若い学生と個人的に接触するようになっていたが、特に彼が親しく接していた「少年中国学会」が「マツティーニの若いイタリア党を意図的に模倣したもの」²¹であることは、すでに十分に認識していた。マツティーニが新しいイタリアを創ろうとしたように、少年中国学会も、「少年中国」の名義で、未来の中国を築こうとしていた。イギリスの歴史研究者ホブズボームは、大学の教師や学生がナショナリズムを実現する過程において果たす、中心的、急進的な役割について言及しているが、これは中国の歴史とも重なる。

総合的に考えると、中国に滞在した間に、デューイは、急速に上昇しているナショナリズムを中国で見て、中国にますます近代的な民族—国家（state-nation）が形成されたと見た。「中国中心部に長く住んでいたアメリカ人の教育者は、中国が、西洋が何世紀もかけて成し遂げた文化的、宗教的、経済的、科学的、政治的革命を半世紀で成し遂げようとしていることを訴えている。西洋の方法や考え方との接触によってもたらされた何千もの小さな変化の累積的な効果は、教育を受けた人々の間に新しい精神を生み出した…これらはまさに中国に魅力的な興味を持たせる要因である。」²²

これは、デューイが中国に2年にわたり滞在して、中国の観察を進めようという意欲があったことの決め手となった。

五、デューイの人生における中国の旅の位置

アジアに行く前の十年ほどの間、デューイの人生は、現実生活でも精神生活でも緊張状態に迫られていた。二人の息子の死は一家に打撃を与え、アリスの後の早すぎる死のきっかけとなった。イタリアからの養子サビーノはアメリカ社会に馴染めず、ハワイで自活することになったこと、三人の娘たちが青年期を迎え、教育費が常に高額になっていたことなども挙げられる。世界的な学者としての名声とは裏腹に、デューイの肩の荷は軽くなかった。

一方、デューイは1904年から、紛争の多いシカゴ大学を辞めて、コロンビア大学に移って、一所懸命に仕事をやっていた。特に、教育と哲学の両面で長年取り組んできたことを、著作という形でまとめたいというのは彼の長年の願いであった。彼の最も充実した単著である『民主主義と教育』が出版されたのは1916年になってからのことで、これは彼自身の慰めであると同時に、彼の教育研究の区切りとなるものでもあった。

このように、1919年のこの中国旅行は、経済的にも精神的にもストレスの多い状態が続いていたデューイに、休む機会を与えたのである。一方で、中国で見たり聞いたりしたことも、デューイにインスピレーションを新たに与え、特に五四運動の後、中国社会の急進的なナショナリズム風潮がさらにデューイに政治的な刺激を与えた。かつて「本の虫」と自認していた哲学者デュー

²¹ John Dewey, MW, Vol.13, p.98-99.

²² John Dewey, MW, Vol.13, p.78.

イは、中国の知識人や一般人との二年間の豊富な接触を通じて、変化する東洋社会をより深く理解するようになり、政治・社会問題への関心も深まっていった。胡適はかつて「中国に来る前、デューイは多くの分野で著作を出していたが、社会政治の分野では出していなかった」²³と鋭く指摘したこともある。胡適に招かれて、中国で政治哲学の講義を何度か行った後、デューイは彼の人生で最も重要な政治学の著作の一つである『公衆とその諸問題』を1927年に出版した。それは彼が中国から、アメリカに戻った直後のことだった。また、その以降、デューイはもっと多くの政治的な研究及び運動に携わっていくようになった。

『公衆とその諸問題』の中でデューイは、「原子的個人」を超克する唯一の方法は、個人と個人との密接なつながりを生み出し、それによって「公衆」(public)を構成することであり、「共同体」の形成は実験的なプロセスであり、一度では困難であり、繰り返し研ぎ澄まされる必要があると主張している。これらの理論は、デューイが五四運動などの際に中国で目撃したものと非常によく似ている。そういう意味で、中国の旅はデューイの理論の転換期だったと言っても過言ではない。

本研究は「北京師範大学2020年青年教師教学発展基金」(2020107)と「北京人材青年骨干個人」科研費の助成を受けたものである。

(Illustrations 6 & 7 have been authorized by the Special Collections Research Center, Morris Library, Southern Illinois University Carbondale. While, it is hard to find who owns the intellectual property of illustrations 2, 3, 4 and 5. They are all before 1923, and they are illustrated here only for fair use. The author is always willing to have the copyright holder's contact in the future and really appreciates her/his understanding.)

²³ 袁剛、孫家祥、任丙強：『民主主義与現代社会：杜威在華講演集』、北京大学出版社、2004年、第6頁。